

水 振 協 ニ ュ ー ス

(令和2年度号)

編集・発行 (公財) 滋賀県水産振興協会

草津市志那町柿根 1393-2

TEL 077 (568) 3451

FAX 077 (568) 3788

令和2年度の放流事業結果は・・・

- ・「ニゴロブナ 1,325万尾・ホンモロコ 1,142万尾・ゲンゴロウブナ 143.2万尾・ワタカ 4.0万尾」を放流！
- ・「人工河川 アユ親魚 12.6トンの放流」を実施！「25.1億尾のアユふ化仔魚」が琵琶湖へ流下！

ニゴロブナ

6～7月の2cm稚魚の放流尾数は、水田育成が 1,138.6万尾(計画800万尾)、栽培漁業センターでの生産放流が24.4万尾で、合計1,163万尾でした。また、10～12月にかけて、平均体重17.0gの大型稚魚64.8万尾を栽培漁業センター、平均体重22.5gの大型稚魚26.9万尾を北山田地先筏(草津市)で各々生産し、さらに滋賀県漁業協同組合連合会(県漁連)から平均体重19.3gの大型稚魚7.8万尾を購入し、合計で99.5万尾(計画97.5万尾)を放流しました(放流内訳は南湖25.6万尾、北湖73.9万尾)。その他に、県漁連では10月に平均体重20.9gの大型稚魚10.7万尾を独自事業として北湖へ放流されました。

水田育成 主に沿湖漁業協同組合の御協力により実施し、620.1反の水田にふ化仔魚(卵からのふ化仔魚換算を含む)で 2,553万尾を放養し、約1か月後の中干時に2～3cmの稚魚 1,138.6万尾を琵琶湖に放流しました(放流内訳は南湖151.3万尾、北湖987.4万尾)。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約45%でした。

また、赤野井湾周辺の水田(守山市)50.4反にふ化仔魚 202万尾(計画200万尾)を放養しました。水産試験場の調査によりますと、流下率(流下尾数/放養尾数)が約31%で、62.5万尾の稚魚が赤野井湾地先に流下しました。

放流効果 当協会では種苗放流の事業効果を知るために、令和3年2～3月の今冬季に、北湖において主に小糸網で漁獲されたニゴロブナの標識調査を行っています。今冬季の放流魚の混獲率(漁獲魚に占める放流魚の割合)は調査中ですが、令和2年2～3月(冬季)の放流魚の混獲率は 46.4%(前年は39.3%)でした(北湖での漁獲物741尾調査)。それら放流魚のうち、水田放流の稚魚と沖合及び沿岸に放流した大型稚魚の混獲率の内訳は、各々 27.8%と 18.6%でした。平成25年度～令和1年度まで、北湖の放流魚の混獲率は約30～50%の間で、事業効果としては、ほぼ安定した傾向にあります。また、令和2年3～5月の南湖における放流魚の混獲率(調査尾数302尾)は、68.9%(内訳は水田放流の稚魚が 37.6%、大型稚魚が

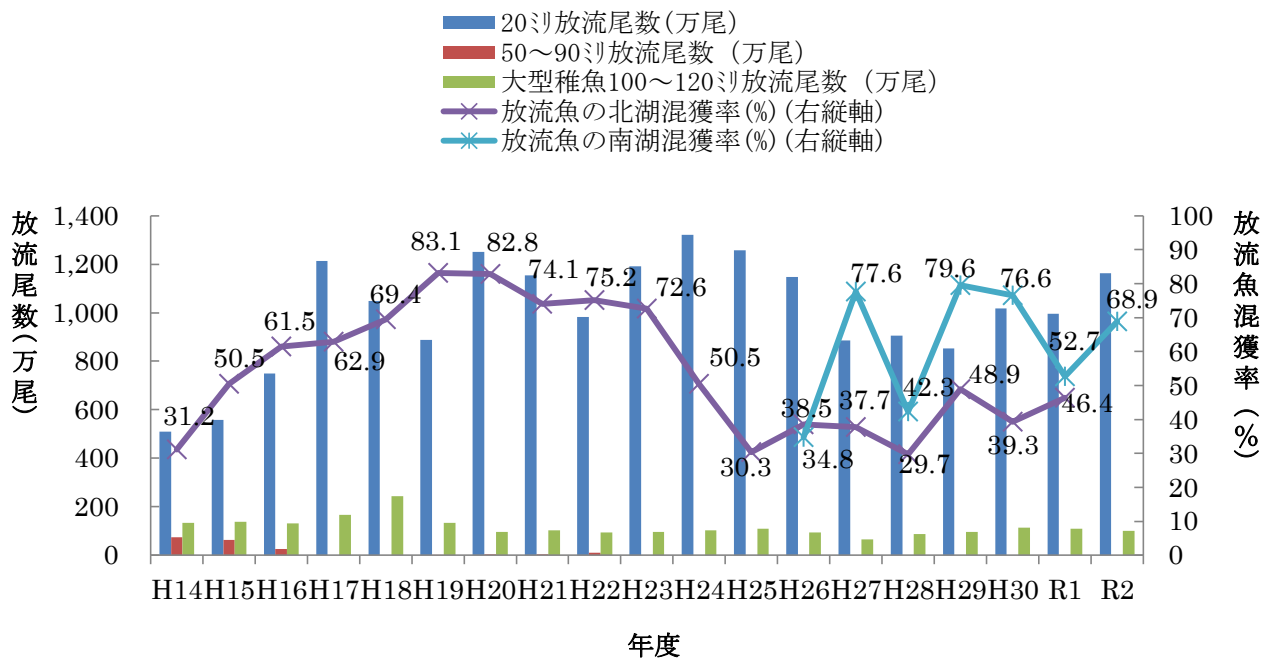
30.9%)で、北湖よりも放流魚の割合が高い結果となりました。なお、平成26年度～令和1年度まで、南湖の放流魚の混獲率は、34.8%～79.6%の間で推移し、6か年のその混獲率の平均値は60.6%でした。



ニゴロブナ大型種苗の放流前取上検量(山田筏施設)



ニゴロブナ大型種苗の放流(南湖)



ニゴロブナの年度別放流尾数(万尾)及び放流魚混獲率(%)の推移

ホンモロコ

水田育成 ニゴロブナと同様に、より放流効果の高い水田の生産力を利用して2～3cmの稚魚に育ててから、中干時に琵琶湖へ放流しました。詳細につきましては、主に沿湖の土地改良区管内の農業者さんの御協力により実施し、778反の水田にふ化仔魚で2,811.6万尾を

放養し、約1か月後の中干時に2~3cmの稚魚 970.0万尾(計画 900万尾)を琵琶湖に放流しました(放流内訳は南湖 41.1万尾、北湖 929万尾)。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約 35%でした。

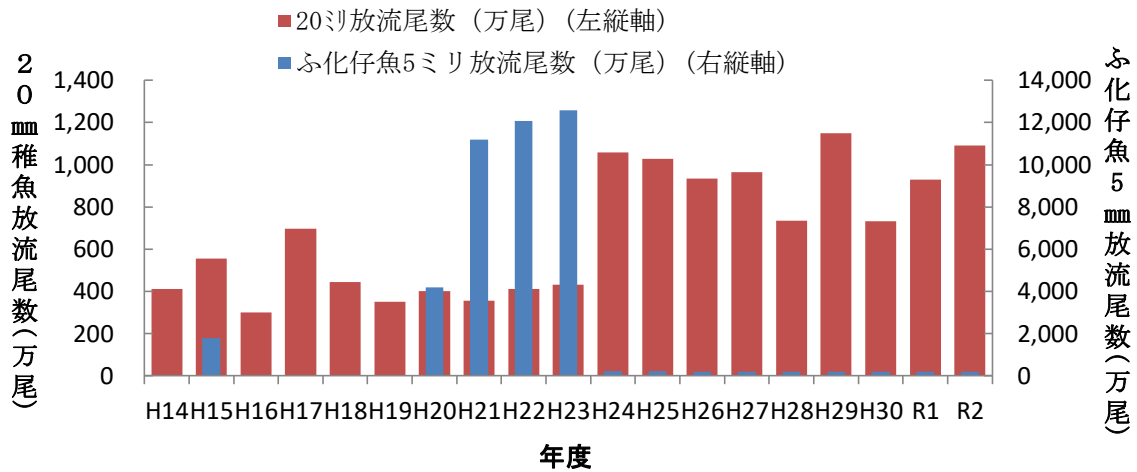
また、赤野井湾周辺の水田(守山市)51.5反にふ化仔魚 204万尾 (計画 200万尾)を放養しました。水産試験場の調査によりますと、流下率(流下尾数/放養尾数)が約 26%で、52.2万尾の稚魚が赤の井湾地先に流下しました。



水田にホンモロコふ化仔魚を放養



水田で2~3cmに育ったホンモロコ稚魚



ホンモロコの年度別放流尾数(万尾)の推移

ゲンゴロウブナ

栽培漁業センターにおいて、約9cmのゲンゴロウブナ稚魚 3.8千尾を生産し、次年度以降の親魚候補としました。



産卵基体に産卵するゲンゴロウブナ親魚(採卵)

ワタカ

栽培漁業センターにおいて、生産した約4~5cmのワタカ稚魚 4.0万尾(計画1.5万尾)を主に南湖に放流し、さらに 7.6千尾を次年度以降の親魚候補としました。

また、南湖で漁獲されたワタカ 239尾について標識調査を行い、その結果、放流魚は、84.0%(前年は95.2%)を占めていることがわかりました。このことから、南湖においては天然のワタカ資源が非常に少ないことがわかります。



ワタカ稚魚の放流



ワタカの稚魚(栽培漁業センター飼育池放流前取上検量時)

アユ (人工河川管理運用事業)

令和2年度は、早期放流用の養成親魚として、8月26日~9月2日にかけて親アユ 8,000kg、272,100尾を安曇川人工河川へ通常放流しました。また、姉川人工河川へは、9月12日~15日にかけて姉川河口のヤナで特別採捕した天然親アユ 3,903kg、600,500尾を放流しました。それら放流親魚の産卵ふ化の結果、9月7日~10月20日にかけて合計で 25.1億尾(前年は25.2億尾)のふ化仔魚を琵琶湖へ流下させました。また、9月15日には県の指定により田川上流域(長浜市)へ同じく天然親アユ 715kg、110,000尾を放流しました。



特採天然親魚の放流(姉川人工河川)



流下ふ化仔魚調査(安曇川人工河川)

「LOVE BLUE 事業」による種苗放流

令和2年度から、一般社団法人 日本釣用品工業会が実施する水辺の環境保全を目指した社会貢献事業である「LOVE BLUE 事業」と当協会が連携して、漁業だけでなく釣りの対象でもあるホンモロコ、ゲンゴロウブナについて、以下のとおり水田育成による種苗放流事業を行いました。

ホンモロコ 南湖周辺(草津市及び守山市)の水田 109.5 反に、ふ化仔魚で 402 万尾(計画 400 万尾)を放養し、約 1 か月後の中干し時に 2~3 cm の稚魚 119.8 万尾を赤野井湾や津田江湾などの水域に放流しました。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約 30%でした。

ゲンゴロウブナ 近江八幡市(西の湖)、高島市及び長浜市の水田の計 66.8 反に、ふ化仔魚で 271.2 万尾(計画 250 万尾)を放養し、約 1 か月後の中干時に 2~3 cm の稚魚 143.2 万尾を琵琶湖に放流しました。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約 53%でした。



水田で 2~3 cm に育ったゲンゴロウブナ稚魚の放流

最後になりましたが、県水産課、県水産試験場及び各関係漁業組合の各位に対しまして、種苗生産、放流及び標識調査にご協力頂きありがとうございました。